教区概史

〈はじめに〉

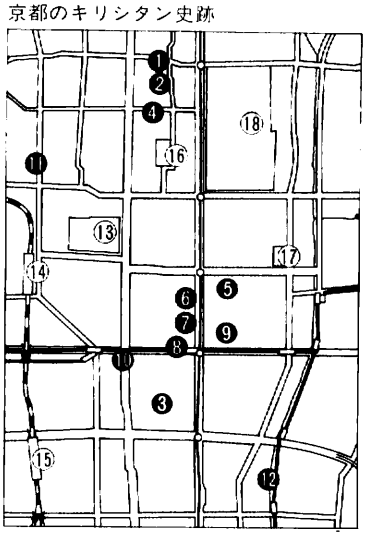
1549年、日本にはじめてキリストの御教えを伝えた聖師フランシスコ・ザベリオの宣教方針は京都（都）を中心に広めることであり、その目的で1551年１月京都に入洛したと記されている。このことから、京都における宣教史の始まり（京都教区の前身として）は16世紀に遡るといえよう。

「京都」は日本はキリシタンの黎明期からその名を印し、現在に至っていること、殉教者の尊い血によって洗われた町であることに思いを馳せるとき、京都教区創立50周年誌を編集するにあたり、この時代を瞥見し、神の恵み（日本にもたらした救いの歴史）の軌跡をたどらないではいられない。

第一期（キリスト教伝来～日本の鎖国）（注1）

1549年８月15日、初めてキリストの教えがフランシスコ・ザビエルによって日本にもたらされた。「翌年1550年末から1551年初めにかけて、ザビエルは京都に第一歩を入れた」と記録されている。（滞在は、わずか11日とあるが…）が、「入洛した彼の目に移った京都は引き続く戦乱に荒廃し、朝廷は式微を極め、幕府も名のみという有様であり…今にも戦争が勃発しそうな不穏な気配におののいていた。ザビエルは『今はこの地はデウスの御教えを述べ伝える態勢になっていないと判断』せざるをえなかった。そして、福音を受け入れる余裕のない哀れむべき京童のために熱い同情の涙を流し、オラショを捧げ、鳥羽から淀を下ったのであった」（注2）

京都のキリシタン史跡



Historic Place of Christian Era in Kyoto.

❶イエズス会南蛮寺
❷だいうすつじ（キリシタン町）
❸だいうす町（キリシタン町）
❹一条のつじ（26聖人受難地）
❺ベアタス会受難地
❻玉蔵町（宣教師ヴィレラの住居跡）
❼イエズス会南蛮寺
❽四条革棚町（ヴィレラ住居跡）
❾四条烏丸（同　上）
❿フランシスコ会聖堂・修院・病院
⓫だいうす町（キリシタン町）
⓬都の大殉教地
⑬二条城
⑭ＪＲ二条駅
⑮ＪＲ丹波口駅
⑯府庁
⑰市役所
⑱御所

「1554年から、ザビエル師の遺志を継いだトーレス師が京都への入洛準備をし、1559年、ヴィレラ師によって京都伝道が開始されている。入洛後、約２年間の転々とした仮住居時代、15年間の危険に曝された仮聖堂時代を経て、1576年京都布教史上最も注目すべき天主堂、俗称南蛮寺が建立せられる運びになったのである」と海老沢氏はその著に記しておられる。（このとき住居跡、最初の礼拝堂、および聖堂跡所在地については、河原町教会「宣教百年の歩み」参照）

また、氏は「この聖堂建設にあたり、『都に非常に立派な聖堂を立てる計画』が考えられたが、この当時の状況を考えてその経済力は当時の京都キリシタンの状況を正当に観察する限りにおいては想像されぬところであり…従来ほとんど知られていなかったことをここにして記して置こう。（中略）実際は京都キリシタンは不可能であったことを、その精神的一致によって敢行し、それをついに可能ならしめたのである」と述べ、この聖堂が京都の信徒達の総力によって立てられたことを記しておられる。更に「それらの中には自らよった縄、手一杯の釘、拾い集めた板ぎれ、大工職人のためとわずかの魚、少量の米を持参するもの…貧者の一燈レプタ二つの捧げものが数限りもなく…。こうして京都信徒の純真な捧げものは、ついに広大壮麗な南蛮寺を建立せし

めるに至った」(注3)と感動的な言葉で結んでおられる。このようにして建てられた聖堂もその後20年余、キリシタン弾圧により消滅したことは残念である。京都という土地柄、宣教は当初より困難を極めた。しかし、こうした状況の中にも、主の御教えは浸透していった。河原町教会「宣教百年の歩み」には当時の教会跡が記されている。(注4)

1587年に出されたバテレン追放令、1597年の26聖人の殉教(注5)と状況は険悪となり、1612年の徳川家康によるキリシタン禁教令が発布されるに至って京都のキリシタン史は悲惨を極める。1619年10月6日の『都の大殉教』のときのテクラとその5人(実際は6人—テクラは臨月の身重であったと記されている)の子供の殉教はあまりにも有名である。(注6)

第二期(パリー・ミッション宣教期)

迫害の嵐が過ぎ、200年余続いた鎖国政策も解除し、いち早くフランスのパリー外国宣教会の宣教師たちが来日した。

この来日に先立ちパリー・ミッション会の司祭、フォルカード師は、日本の伝道の使命を帯びて1844年4月28日琉球那覇に上陸、日本入国の機会を待った。ここで、フォルカード師は、司教に叙階され(1846)決して入国することのない日本の初代教区長として任命され、『時』を待っていたのである。

1855年ミッション会のジラール師(後の教区長)たちの一行が平戸、長崎に来訪するが、上陸を許されず香港に去る。

1858年、ルルドに聖母が出現されたその年、日仏通商条約が調印され、ミッション会のジラール師等の一行が上陸、ジラール師は日本教区長に任命され、横浜のフランス領事館に着任している。こうして、宣教は再開された。

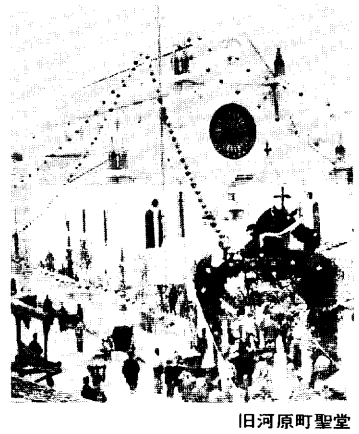
1878年:1869年に来日したパリー・ミッション会のヴィリオン師は京都に入洛、高倉二条上るの地に仮住居を構え、京都の宣教が再開される。(くわしくは「宣教百年の歩み」参照)

1888年、三条河原町の現在地を購入、1890年、聖堂が建立されている。(現在、明治村に保存)この同じ年、1888年、大阪司教区が創立され、京都はこの教区に属し、1937年、京都教区が独立するまで続く。

これに先立つこと数年、(1885年)ヴィリオン師は、舞鶴、宮津、伊勢方面に伝道を開始しておられる。舞鶴、宮津の宣教はパリー・ミッション特にルラーヴ師(注7)の活躍が顕著である。1907年に宮津、1928年に舞鶴にそれぞれ裁縫学院が開設されている。(暁星、日星の前身) 記録によると1891年に舞鶴に仮聖堂が建てられている。

この時代の宣教、殊に京都における宣教はきわめて困難であったようである。1886年のパリー外国宣教会の京都における宣教の記録に「宣教師本来の居住地は京都である。そこには礼拝堂のついた日本家屋があるが教会が欲しい。まもなくどうしても必要になるであろう。活動はきわめて困難である。

ヴィリオン師
Rev. A. Villion, MEP (First Pastor of Cathedral)



旧河原町聖堂
Dedication of Old Cathedral of Kyoto (1889)

この町は事実日本の仏教の中心であり…（中略）にもかかわらず宣教師は全然絶望していない。ヴィリオン師は書いている。『私と伝道士達は市の各所での講演会を増やし、全地域にわずかですが活動を広げました。大人で30人の洗礼があり、信者の数は170名ぐらいになりました。—ショファイユの幼きイエズスのシスターたちが養護施設を作ったところです…』」と記されている。

また、1887年にはクーザン師は「…京都を中心とする地方ではヴィリオン師は相変わらず熱心に努力している。その結果99名の大人が洗礼を受けた（京都市53名）。修道女たちは京都に定住するためのさまざまな困難と直面しながら頑張っている。京都ではヨーロッパ人は公式に在住は許されていないのである。…今のところ京都市には238名。地区全体で274名の信者がいる。」（注8）と書いている。

1889年2月18日、転任の命を受けたヴィリオン師は念願のザベリオ聖堂の献堂を待たず、京都を去っていく。

1904年には、奈良の伝道が開始され、高畑に仮聖堂が建てられる。

1906年、大宮下立売東南角に西陣教会が誕生している。

日本のキリシタン宣教史にとって波乱の時代は終わろうとしていた。しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界は又もや不穏な状態となっていった。1914年、第一次世界大戦が勃発するや、フランスは参戦、フランス人である神父様方が従軍司祭として戦いに加わり、1917年黒門町の教会は一時、閉鎖の止むなきに至った。（西陣の教会は当時、黒門町に移転していた）この教会の閉鎖状態は、昭和3年（1928年）に再開されるまで約10年間続くことになり、この間、教会は外面的には空白状態となり、信徒達は河原町の教会でミサに預かった。西陣教会再開のこの年、1928年7月古屋師が司祭に叙階されたのである。

1925年には、山口に転任されたヴィリオン神父が奈良の教会の主任として赴任、7年間の宣教の後、又も新聖堂の建立を待たず帰天され、8カ月後に奈良登大路町の聖堂が建立されている。

1928年、西陣教会の信徒が再開の喜びを見たのは、新町一条上るの地であり、以後、大宮笹屋町、大宮中立売下るの地へと移転している。パリー・ミッション会による宣教は終わろうとしていた。

第三期　（パリー・ミッションからメリノール会への移管）

1932年、時の教皇使節はメリノール会に日本にミッションを置くように要請され、京都が新しいミッションの中心地になるはずであった。1933年、メリノール会は宣教師達を言葉の勉強のためにまず東京に送る。1934年、第二のグループが来日。

1935年（昭和10年）メリノール会の京都入りは許されなかった。満州事変、日中戦争、第二次世界大戦と情勢は悪化し、日米間の関係も思わしくなくな

りつつあった。このような状況のもとに、心ある信徒たちは賢明さの故にメリノールが入洛する時期でないと判断していたのである。

1935年から1937年の２年間は、滋賀県で活動を開始した。(注9)

初代教区長バーン司教はメリノール管区長の資格で来日されたのである。

1937年、京都は大阪から独立、メリノール宣教会の神父達が、河原町と西陣の教会に赴任、バーン師は初代教区長として就任された。当時の教会は、大津１、奈良１、三重県１、そして京都２(西陣と河原町)、そして舞鶴、宮津は大阪教区に属していた。更に、彦根、唐崎、伏見を加えて置く。後にこの３つは不審火にあう。

以前の西陣教会(現在の司祭館)
The Old Church of Nishijin, Kyoto (1938)

1937年、京都教区が独立した頃の河原町・西陣の教会はウィットロー神父、マキロップ神父であった。

1938年、西陣教会は現在地（新町通一条上る）に定着する。

1940年（昭和15年)、当時の状況を鑑み、バーン教区長は教区長職を古屋師に譲られる。

さざなみ荘(メリノール会最初の布教地)
First Mission Station of Maryknollers in Otsu (1937)

1941年（昭和16年）第二次世界大戦に突入し西陣教会は再び閉鎖の危機を迎えざるをえなくなった（しかし、この間、古屋師が河原町、西陣をかけもち、信徒によって教会は支えられた）滋賀、草津：萬木師、奈良：杉原師、舞鶴、宮津：大阪教区、津：名古屋教区。

※メリノール会との関係詳細は別稿参照

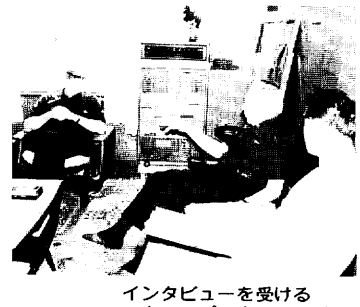
第四期　(戦中)

戦争が激化するにしたがって軍国化が激しくなっていった。日本神道を国教化し、戦争目的完遂のため、一億一心挙国体制がとられた。

外国人宣教師は本国送還の余儀なきを見、邦人司祭も同様敵国の宗教なりとて弾圧された。信者達も神社仏閣を拝礼しないとして迫害される。ミサを始め、公活動の禁止、受難の時代にはいる。戦争が始まって半年後に、外国人宣教師たちは、京都、奈良、滋賀その他の各県の教会に収容される。その後、全員強制送還される。「しかし、バーン師のみ戦争中高野教会に軟禁されました。その頃、古屋神父様は軍に内緒で度々暗くなってから、バーン司祭様に色々のものを持ってきてくださったということです。古屋神父様も捕らえられ30日も軟禁されたそうです。

1945年、終戦となり、バーン師がマッカーサーと相談の上で日本に来た神父がみんな帰ってこられるようにお願いしました」(マキロップ神父、ウィッテ神父とのインタービューより)。

戦争中（昭和16年～20年）は古屋神父が単身、京都を守られたのである。(注10)



インタビューを受ける
マキロップ、ウィッテ神父
Interview with Fr. M. Mckillop, MM and Fr. C. Witte, MM (1987)

第五期（戦後～復興期）

A）終戦直後～戦後前期

終戦直後の精神的、物質的貧しさの中で、人々は精神的にも物質的にも教会を望んでいた時代であった。

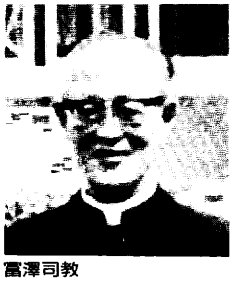
1945年、終戦とともにメリノールの宣教師は続々来日、各地に新しく教会が建てられていった。なお、現在ある学校、幼稚園、施設、修道会は、殆どこの時期に設置されている。現存する小教区の主なものは戦後10年ぐらいに殆どできているのを見ても戦後の復興の目覚ましさを伺い知れよう。特に、メリノールの宣教師達の活躍は目覚ましく、ひとり京都教区にのみとどまることなく日本全体に及ぶものにも関わっている。ララ物資、進駐軍へのバーン師の手紙、放送、これらは皆の周知するところである。「上陸する米兵達よ、守れ厳重な規律、比叡山麓で語るバーン師」（注11）と、進駐して来る兵士（それは祖国の民）に切々と説くバーン師の姿があった。

スタインバック神父
Fr. Leo Steinbach, MM (1945)

戦後のスタインバック師の愛の献身、カトリック校のなかった京都市内に学校が建てられるに当たって、そのために強い援助者として活躍くださったマキロップ神父を始め、当時ご活躍くださった歴代の管区長様方への感謝も決して忘れてはならない。（紙面の都合で詳細を割愛せざるをえない）更に奈良地区のマリスト会、京都北部のレデンプトール会のご尽力をも……。

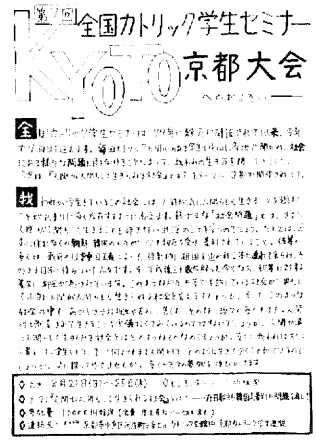
一方、レジオのアクション、ヴィンセンシオ会の活躍は目覚ましいものがあった。そしてこの期に忘れてはならないもう一つの事、それは学連の発足が、ここ京都の地で見られたことである。学連の活動は、京都、いや、日本の教会の福音宣教にとって大きな位置を占めていることに思いを馳せるとき、このことに触れないではいられない。

学連の誕生（福音の情熱に燃えて……）


冨澤司教
Bishop Benedict T. Tomizawa
Bishop of Sapporo
(Spiritual Director of Catholic Students-1950)

当時の学連誌「creatio」３号（昭和24年12月10日発行）に京都学連結成式について、学連副総裁冨澤司教の『過ぎし月日を顧みて』と題した記事の中にその当時を伺い知ることができる。「ちょうど今から３年有余、思えばすべてに事欠く時代であった。初夏の候であったと思う。招かれるままに、三条河原町の教会伝道館で催された京都学連結成式に出席したのは。意外に多数の学生が聖堂前の広場にたむろしていて、特攻くずれの和服をまとい吸い殻を吸っていた。当時帰国して間のなかった私は、学連の存在を初めて見、知ったのであった。定刻、会場にはいれば、すでに空席なきまでに学生でいっぱいであった。韓、田井、稲畑、富山、西村、田中、宇尾、藤井、悉野、柳本の諸君が会場をせわしく駆け巡り、交互に立って熱焔をあげていた。血色に似ず元気良い多士済々、さぞかし規約制定、役員選挙などで一揉めすることだろうと、私は一種の好奇心と期待をもって注視刮目、その成り行き如何

を見守っていた。ところが、確か西村君が司会者であったと記憶するが、その進行手際は巧い以上のもので、一応、集いし者の賛否に諮ってはいたのだが、実質的には一同呆然のうちに規約はおろか委員長以下すべてが束の間に決まってしまった。初代委員長には韓君が選ばれた。韓君、直ちに登壇挨拶したのだが、驚いたことには既に原稿を手にしていて、いうことや名文句である。手回しの良いことまったく微苦笑を禁じえなかった。終わりに、全員起立のうちに、宇尾君一歩前に進み出て宣誓書を力強く読みあげたが、当時の混惑なる時世に、一言一句肝に銘ずる金文字であった。健全なる文明樹立のために若人よいざ立て、その礎石とならん、との気概に燃えていた。名誉総裁古屋教区長、会長国分寺敬治教授であった。(後略)」


第回 全国カトリック学生セミナー
京都大会

Catholic Students' Federation-Seminar News (1983)

このカトリック学生連盟が結成されたのは、昭和21年6月16日であった。当時の様子を山下氏の手記より伺おう。「昭和21年6月16日、河原町教会伝道館で、京都カトリック学生連盟結成式が挙行され、西村議長のもとで満場一致で規約成立が可決され、ここに京都学連が誕生した。第1代委員長、韓氏が選出されるとともに、名誉会長（後に総裁）に古屋義之司教、会長に立命館大学国分敬治教授、顧問団として、稲畑源太郎、柊源一、千野国丸、平木鹿治、柳川徳治郎、冨澤孝彦(後の日本学連総裁)、バーン神父、ブリオット神父、稲畑勝太郎、杉原の各氏が就任する。結成式のしめくくりとして、次のとおりの宣誓が行なわれた。「われら京都教区カトリック学生連盟会員は、神とその永遠の真理を信じ、相互の提携練磨により、われらの信仰および学的教養の向上を図り、もって確固たる団結のもとにカトリック世界観を確立し祖国の再建と人類の幸福のため、救国学生運動の先駆者たらんことを期す。右、宣誓す。　　京都カトリック学生連盟代表　　宇尾光治」

Catholic Students' Federation-1935

こうして終戦後まもなく、1年を経ずして京都学連は発足し、京都学連創立1年にして第3代委員長宇尾氏は就任早々日本学連創設準備委員会を発足、文字どおり、東奔西走の活躍の後、22年4月13日、臨時委員会が開催され、日本学連規約草案がまとめられ、日本学連の基礎が築かれている。当時の記録には「学連創成期の約3年間は委員会議事録によると、すべての会合に名を連ねる宇尾第3代委員長の全国および京都を駆け巡る『日本学連』創設のための遊説活動に尽きると考えられる。このことは伝説として語りつがれ、その後の京都学連を母体とする日本学連の基礎を据え付けたのである。」(注12)

Cathoric Students'Federation-Sem(1955)

記録によると、学連の目的は「私達が受洗によって与えられたその喜びを私達だけで占領することなく、私達の友人にも分け与えるということはカトリック信者として、信仰より湧き出づる当然の義務です。特に多くの学生にその喜びを与えるのは私達カトリシズムに生きる学生以外にはありません。そのために組織されたのがカトリック学生連盟であり、私達は学連を通して、まず、何よりも第一に自己の聖成を、そして確固たる信仰の基礎に立って、多くの友人のために働き、そうすることによってますます自己の聖成を図るのが目的であります。すなわち学連はアクチオ・カトリカの団体であり、私達学連員は知的使徒職の使命を帯びているのであります」(注13) とあるよう

Committee Members (1984)

に、実に多方面に亙る知的使徒的活動（注14）が織りなされている。

昭和23年10月31日「ついに『全国カトリック学生連盟結成大会』が河原町教会付属幼稚園にて創世紀の夢が実現された。これを受けて第１回全国大会が、京都朝日会館で開催され、議事録には『歓喜に絶えず』とある」と当時の記録は語る。（注15）

昭和27年12月８日、第９代委員長福山徹氏の時代に、指導司祭であり副総裁である冨澤神父は札幌司教として転任されるに及んで、学連の事務局は西陣教会から聖トマス学院に移されるのである。

このようにして、記録によると「学連は、第10回の全国大会を契機にあたらしい時代へと発展し、第二バチカン公会議以後さらに新時代、『福音のためのひとつのチーム』へと引き継がれていくのである。そしてこのチームを母胎として、又、新たな学連が始まろうとしている」と。

B）戦後―布教時代

戦後、精神的、物質的に教会を求めてくる人々は教会に招き入れられる。しかし、洗礼を授けることに主眼が置かれたことは否めない。教会、施設等は布教を目的とされていた。ただ、その中で子羊会のような直接に布教を目的としない障害者の集いも出来上がっていった。この時代は上記の時代に次いで、学校、修道院、施設が出来上がっていった。

しかし、それらの施設は布教の一貫として考えられていた時代である。

古屋司教祝聖式
Episcopal Ordination of Bishop Paul Y. Furuya (1951)

1951年京都知牧区は、「司教区」に昇格、古屋師が初代司教として着任。９月21日、聖マテオの祝日に、駐日ローマ教皇庁大使、フルステンベルグ大司教を始めとする各司教臨席のもとに司教祝聖式が盛大に行なわれた。その日の喜びを、故樺山神父が『叙階式にあずかって』と題して「京都教区がローマ教皇庁より司教区に昇格され、前教区長古屋義之師が初代司教に任命されるとの大いなる喜びの知らせをわれわれ京都の神学生が聞いたのは…」との書き出しで「宣教百年の歩み」に綴られている。

1962年から1965年にわたって第二バチカン公会議が行なわれた。これは20世紀のペンテコステともいわれる画期的な出来事であった。

第六期　（第二バチカン公会議後）

第二バチカン公会議によって教会は大きく変革されていった。この20年の歩みの中で、各自はそれぞれ、問い掛けられ、教会内の各層（司祭、信徒、修道者）はそれぞれの生き方、考え方の見直しを迫られた。そして、信徒養成と社会に目を向ける姿勢が出始めた。

教区として、教理センター、希望の家が設置され、それが次のステップの

基礎となったことも見逃せない。また、一体化の芽生えとして、司祭評議会、修女連、信徒協の結成を見、青少年の分野では教育の歪みの中で、暗中模索しながら、高校生会、中学生会を組織。一方、第二バチカン公会議の精神をより深く理解するため、公会議文書の勉強会が行なわれ、これが発展し、下からの盛り上がりとして京都教区ビジョンが生まれたのである。(注16)

1976年9月23日、京都教区は又、新しい転換期を迎えることになる。

戦前、戦中、戦後と大阪司教区に属していたときから、文字どおり孤軍奮闘をしながら京都教区民を導き、教区の基礎を築いてこられた古屋司教が教区長職を引かれることになり、新しく田中司教を迎えることになった。

田中司教は、着任早々「京都教区に新司教が誕生して、早9カ月になろうとしている。その間、田中司教は驚くほどの勢力とスピードで、教区内を隈なく巡られた。編集部もその足取りを追ってみて、いまさらながらその多忙さに目を見張るばかりである。この膨大なスケジュールから、教区内外の一つ一つの出来事を大切にしていこうとする田中司教の熱意が伝わってくる。…」と教区時報再刊第1号に記されている。田中司教の教区民への熱意と人柄がほのぼのと伺える。

この田中司教のもとに教区民は一体となって、新しき時代の福音宣教へと取り組んでいるのである。すでに6年前（1981年11月23日）に発表された教区ビジョンこそ、その表われではないだろうか。

特にビジョン宣言（公会議の具体化）以後、大きな新しいうねりが生じ始めた。社会に目を向け、しかも、問題として捉え始めた。ビジョンの具体化を推進し、又宣教司牧への共同責任を目指して作られた宣教司牧評もその問題取り組みに大きな力がある。

例えば、平和の歩み学習会で多くの事を学んでいく。この学びを通して、平和と人権が福音と生活に欠かせないことに目覚め始めた。体験学習もある。ウォーカーソンや募金活動、ベトナム難民との関わり等、貧しい人々の連帯が少しずつ芽生え始める。

教区ビジョンが出されて3年後（1984年6月22日）、司教団から「日本の教会の基本方針と優先課題」が出されたことは意味深いことである。

一方、男女総長管区長会がそれぞれの会合を重ねながら「貧しい人々に福音を」「貧しい人々とともに連帯を生きる」方針が打ち出され、更に、日本司教団も「基本方針と優先課題」の宣言文を発布、今年、その第1回福音宣教推進全国会議が京都で開かれる運びとなったことは、誠に意味深いことである。この同じ年、京都教区が教区として独立して50周年を迎えたことは、すべては神の摂理とはいえ、奇しき関わりといえよう。“皆が一つならんことを！”と祈られた主の御旨は、“貧しい人々は私達を一つに集める”という現実の中に実現して行きつつあるのである。第二バチカン公会議以後、この精神を受け、『京都教区ビジョン—基本方針と優先課題—教区創立50周年—福音宣教推進全国会議』へと、この大きな一貫した流れの中に、刷新と見直しを通して、社会に開かれた、社会とともに歩む教会として、21世紀へと歩み続ける

希望の家
Hope House (Center of Social Welfare Activities)

田中司教祝聖式
Episcopal Ordination of Bishop Raymond K. Tanaka (1976)

ウォーカーソン
Annual Walk-a-thon (Solidarity with our Asian brothers and sisters)

…ともに…。

21世紀に向けて！

京都教区創立50周年は一つの節目であり、私達京都教区民はこれを契機として、神の民として主の望まれる社会—教会共同体、人類共同体、社会とともに、貧しい人、小さな人々が生きられる社会—の建設に賭けた歴史の１コマとしての役割を演ずるにたるよう努めたい。“マラナタ！”の願いをこめて。

京都司教区現勢調査報告（1986年12.31現在）

面　　積：18,098.62㎢
（京都府・滋賀県・奈良県・三重県）
人　　口：6,844,794人
信者総数：21,421人
求 道 者：470人
小 教 区：46
巡回教区：15

人員構成

（　）＝志願者数

	邦人	外人
司　教	2	
司　祭	27	57
修道士	0(9)	9(2)
神学生	3	
修道女	253(9)	30
聖母カテキスタ会	24	

司祭・修道士

（　）＝志願者数

		司祭		修道士	
		邦人	外人	邦人	外人
教区		18			
宣教会	メリノール宣教会		19		2
	ザベリオ		1		
	グワダルペ会		3		
修道会	マリスト会		12		
	聖ヴィアトール修道会	1	7		5(2)
	レデンプトール会	3	4	0(5)	1
	男子エスコラピオス修道会		6		
	男子跣足カルメル修道会	2	2	0(4)	1
	ドミニコ会	2			
	フランシスコ会		2		
	カプチン会	1			
属人区	オプスデイ		1		
合計		27	57	0(9)	9(2)

修道女

（　）＝志願者数

	邦人	外人
ノートルダム教育修道女会	65(4)	9
聖母訪問会	35	
ヌーベル愛徳およびキリスト教的教育修道会	35	
幼きイエズス修道会	18	
ウイチタ聖ヨゼフ修道女会	22(1)	4
カルメル会	15(1)	
カロンデレットの聖ヨゼフ修道会	8(1)	5
聖ドミニコ女子修道会	8(5)	
聖心のウルスラ修道会	9	2
聖ドミニコの宣教修道女会	6	
メリノール女子修道会	3	9
コングレガシオン ド・ノートルダム	4	
汚れなきマリア修道会	3	
カノッサ修道女会	4	
善きサマリア人修道会	4(2)	1
聖ウルスラ修道会	3	
イエズスの小さい姉妹の友愛会	3	
汚れなき聖母の騎士聖フランシスコ修道女会	8	
聖母カテキスタ会	24	
合計	253(14)	30

小教区概況（信徒数）

A. 京都市	
1. 河原町	1,813
2. 伏見	368
3. 桂	733
4. 衣笠	786
5. 北白川	292
6. 九条	581
7. 小山	259
8. 西陣	386
9. 西院	1,163
10. 高野	367
11. 山科	452
12. 桃山	570
小計	7,770

B. 京都府南部	
13. 青谷	251
14. 亀岡	160
15. 長岡	333
16. 園部	229
17. 宇治	612
18. 田辺	799
小計	2,384

C. 京都府北部	
19. 西舞鶴	441
20. 東舞鶴	248
21. 報恩寺	681
22. 綾部	152
23. 宮津	377
24. 網野	142
25. 加悦	311
26. 岩滝	196
27. 福知山	106
28. 丹後大宮	176
29. 峰山	108
小計	2,938

京都府　計	13,092

D. 滋賀県	
30. 彦根	289
31. 草津	716
32. 長浜	103
33. 大津	557
34. 唐崎	170
小計	1,835

E. 奈良県	
35. 奈良	886
36. 富雄	316
37. 郡山	398
38. 高田	601
39. 八木	300
40. 御所	151
41. 登美ヶ丘	497
小計	3,149

F. 三重県	
42. 伊勢	572
43. 桑名	217
44. 松阪	339
45. 尾鷲	47
46. 鈴鹿	255
47. 亀山	74
48. 津	556
49. 久居	149
50. 上野	140
51. 四日市	689
52. 名張	107
小計	3,115

総計	21,191

（注1） この時期は松田氏はこの間に更に八期を分けておられるが、本稿ではまとめた。

（注2）海老沢氏著：日本キリシタン史

（注3）同上

（注4）河原町教会「宣教百年の歩み」

（注5）26聖人は、京都で捕らえられ、耳をそがれた後、京都の町を引き回され、800キロの死の行進の後長崎西坂の丘で殉教する。

（注6）日本キリシタン殉教史：片岡弥吉著

（注7）ルラーヴ師は1885年来日、河原町教会の助任として、ヴィリオン師とともに、舞鶴、宮津を伝道し、後、京都北部、特に宮津の伝道はルラーヴ師に負うところが多い。小伝参照。

（注8）パリー外国宣教会の京都における宣教記録（キリシタン研究会資料より）

（注9） 京都への入京の状況については、古屋司教の「芽生え」参照。

（注10）よろこび：私の見た戦時中の古屋司教。

（注11） 暮しの手帖1984年夏号「女の人を守った人—敗戦13日の秘話—」及び「芽生え」参照。

（注12） 山下氏提供の資料より、因に、京都学連は京都教区の組織として確固とした位置付けを有し、第二バチカン公会議前より、信徒使徒職として大きな貢献をしていた。現在、社会に、教会に、信徒として福音宣教に活躍している諸氏はこの学連メンバーであった。

（注13） 同上の資料より。

（注14）「世界のカトリック者に訴える日本カトリック学生の声」（creatio 4）「平和問題とカトリック学生」（creatio 4）；「社会改造を目指す青年達」（声：29年9）「愛の哲学を巡って—神の合せ賜いしもの—」（creatio 3）等の出版が見られる。

（注15）学連資料、山下氏提供資料。なお、学連に関しての多くの資料を得たが、紙面の関係で割愛せざるをえなかった。資料として別に整理したい。

（注16）ビジョン作りの経緯。

1979司祭評議会にて1司祭から「ビジョンを作っては？」との提案があった。

1980．1～3：法人司祭達による公会議文書の勉強会。

次いで各ブロック別、テーマ別、合宿研究。

1980　ビジョン中間報告。

1981.8　ビジョン作りのため、3回の合宿。

1981.11.23：ビジョン宣言。

1982.1.6　ビジョン推進母体設立:推進連絡協議会。

1985.1　司牧評議会設立。

⇩

宣教司牧評議会（司教の諮問委員会）

⇩

福音宣教推進全国会議（ＮＩＣＥ）